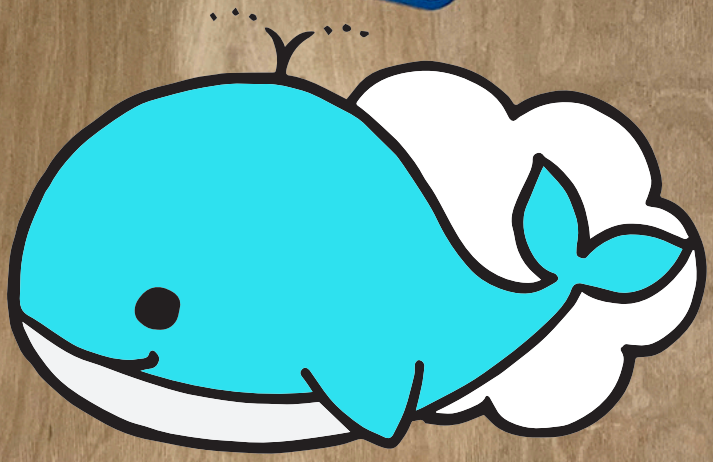
社会福祉法人イエス団賀川記念館　機関紙『ボランティア』

ボランティア Volunteer

VOL.131



特集

＜開設＞多機能型児童発達支援・賀川記念館くじらぐも

ボランティア　第 131 号

発　行　2023 年 3 月 31 日
発行所　社会福祉法人イエス団賀川記念館
発行者　馬場一郎

社会福祉法人イエス団賀川記念館
〒 651-0076　神戸市中央区吾妻通 5-2-20
Tel 078-221-3627　Fax 078-221-0810
E-mail　office@core100.net
HP　http://core100.net

賛助会費・寄附金のお願い

賀川記念館の事業は皆様によって支えられています。

賛助会費・寄附金を下さった方には寄附控除制度が適用されます。

賛助会費

【個人】　一口　1,000 円より

【団体】　一口 10,000 円より

寄附金

何円からでも可能

振込先

【ゆうちょ銀行】　口座番号：01140-8-3721　社会福祉法人イエス団賀川記念館

賀川記念館は以下の事業を行っています。

①隣保事業（天国屋カフェ／外国にルーツをもつ子どものための学習支援教室「はいず」／その他）

②福祉教育事業（ミュージアム／総合研究所）

多機能型児童発達支援・賀川記念館くじらぐもが開設します

2023年4月より「多機能型児童発達支援・賀川記念館くじらぐも」を開設します。皆様にはより一層お支えいただきたいと存じます。

今号では館長馬場一郎（管理者）による「開設にあたっての意気込み」と児童指導員による対談をお届けいたします。

賀川記念館館長 馬場一郎「開設にあたって」

賀川記念館が学童保育ひまわりを開設（一九六四年）してから間もなく、障がいのある子どもたちの放課後の見守りができないかというニーズがありました。そして神戸市とのやり取りを経て、二〇〇四年に「日中一時支援事業」（神戸市の事業）くじらぐもとして開始しました。その後、神戸市から「放課後等デイサービス」（国の事業）への移行を言われ、現在のくじらぐもとなります。

くじらぐもには、友愛幼児園を卒園した子どもたち、学童保育ひまわりに在籍している子どもたちもいます。それぞれ賀川記念館のある地域の子どもたちです。友愛幼児園をスタートとして、くっく（児童発達支援事業）、ひまわり（学童保育）、そしてくじらぐも（放課後等デイサービス）が友愛幼児園卒園後の子どもたちの見守りとして機能していると言ってもよいと思います。くじらぐもは現在賀川記念館内で活動をしていますが、二〇二三年四月から地域に出ます。そしてこのことには大きな意味があります。

くじらぐもは障がい児通所事業として位置づけられています。現在地域の小学校、中学校、支援学校の子どもたちが放課後、くじらぐもに来て学習の時間を持ったり、ゆっくりしたり、療育的な支援を受けたり、安心して過ごせる“居場所”としての働きを継続しています。子どもたち自身が楽しく、居心地がいい場所として機能できるように工夫しながら運営しています。今回地域に出ることによって、より地域と密着し、地域のニーズを肌で感じながら事業を進めていきたいと思っています。地域の子どもたちが抱える課題をくじらぐもとして受け止めながら、また賀川記念館の地域福祉事業と連携しながら、できることを模索していきたいと考えています。

地域の子どもたちの課題は多岐にわたります。福祉的な課題、教育的な課題、学校との連携、地域との連携、そして保護者との連携。子どもに関わるそれぞれの機関、団体、個人が協力をしながら進めていかなければいけないことがあります。その連携、協力が難しい場面があります。その難しい場面をどのようにより良い方向に向けていくのかが重要です。個別のケースを丁寧に取り上げ、ひとり一人に寄り添った支援が必要です。

賀川豊彦が一九〇九年、二一歳の時に単身スラムに住込み、法律や制度がない時代、目の前で苦しむ人々のために、できることは「なんでも」行い、その実践の多くが現代において制度化されている、そのような取り組みが必要です。制度に捕らわれない、ひとり一人の子どもを真ん中においた取り組み、そしてその課題やニーズを地域や行政と共有していく。賀川記念館が持ち続けなければいけない精神だと思っています。どうぞ、期待して見守ってください。よろしくお願いいたします。

大垣嘉子
（児童発達管理責任者）

×

藤井航
（主任・現場担当者）

小野：くじらぐもの目指す「療育」はなんですか？

大垣：一番根底にあるのは、「ほっとできる場所」ということです。「第三の居場所」として小休憩できる場所でありたい。その子にとっての安心安全がで確保できた上で、その子の「得意」を活かすことができたらいいですよね。

藤井：「療育」って言っていろんな「療育」があると思いますが、僕はやっぱり「生活に活かせる」ことが大切だと思っています。その時々のシチュエーションに合わせた、自分なりの対応ができるようになってほしいと思います。プログラムの中だけで完結するのではなく、生活の中で子どもたちの成長が感じられることが、くじらぐもらしい療育なのかもしれません。

大垣：実際に起こった喧嘩の中で話し合う。それはよく、くじらぐもの中で行っています。その時じゃないと伝え難いことが多くあるなぁと思います。

藤井：くじらぐもでは、日常的な買い物に出かけたり、生活に根ざした療育を心がけていますね。「生活」を意識していることが特徴かな。

大垣：くじらぐもにきている子どもの中には、自分の思いや気持ちを伝えることが苦手な子どもたちもいます。なので自分の気持ちや相手の気持ちを考えながら「自分を表現する」ことをお手伝いしています。それが「適切に助けを求める力」に繋がると考えているからです。

そのためには、まず大人が子どもの声を聞きたいと思っています。くじらぐもでは、何かトラブルや課題があった時、職員で話し合います。その中で、よく「子どもにも聞いてみません？」と提案しています。ついい大人は頭でっかちだから、「こうしたら良くなるよ」とか「こうしたらうまくいくよ」と、すぐに解決策を提示してしまいがちです。でも、子どもが納得してなかったら、やっぱり身にもつかないし、それが本当に良い解決策なのかも分かりません。

藤井：「まず子どもに聞いてみましょう」と言えることは、子どもと大人が対等な関係を築くための大切なポイントですよね。

大垣：そだからこそ、私たちは子どもたちを肯定的に受け入れたいと思います。だから結局それが「認める」ということにつながるのだと思います。難しいですけどね。

くじらぐもには、団体行動が苦手な子どももいます。でも心のどこかでやっぱ誰かと繋がりたいという気持ちを持っています。関わり方に特徴があったり、世間一般で言われている関わり方とはちょっと違うだけ。人との関わり方や人との繋がり方も人それぞれです。そこには自由さがあってもいい。だけど、「社会性」が全くないわけではない。自由ではあるけれど、他人のことも大切にできる。そういう空間を作りたいと思います。そもそも、すべての人は、一人一人違いがあります。そのことを理解しないといけないですよね。

藤井：イエス団の「ミッションステートメント二〇〇九」に書いてありますけど、「違いを認め合う」ことを実践しあえる空間でありたいと思います。職員や子どもたち、保護者との関わりのなかで、「違いを認め合う」ということを実践する場所にしたいと思います。それができる場所なんじゃないかな。子どもと大人が集まって、生きる上で大切なことを感じ取れる場所にしたいです。

大垣：人の違いを認めるためには、まずは自分を知らなきゃいけない。そうなってくると、「自己肯定感」とか、「自己理解」がものすごく大事になってくると思いますね。

小野：家庭との関わりはどうでしょう？

藤井：家庭も一緒だと思います。当たり前だけど、その家庭の価値観や人との関わり方は違います。家庭の価値観を壊してはいけないと思っています。そういうことを考えながら家庭との信頼関係を作っていきたいです。

大垣：私達のベストが相手のベストじゃないと感じます。つい、「支援者のベスト」で動いてしまいます。でも子どもや保護者は、全く違うことを望んでいたりする。そこに意識を持っていたいです。

藤井：そのご家庭が求めるものに

合ったお手伝いをしたいですね。あと、家庭との連携となると、自ずと地域との連携が不可欠になってくると感じています。

　くじらぐもは、「地域の中で子どもたちの育ちを支える」ということも大切にしたいですね。そのためには地域と深くつながらなくてはいけないとも思っています。地域とつながるためには地域を知らないといけないですね。地域の方と出会いながら、子どもたちの育ちを支えたいと思います。

大垣：地域との連携ということで言えば、「不登校」の課題に関わっていきたいなと思います。学校だけでは収まらない課題がどんどん出てきている。

藤井：時代の変化、それこそコロナの影響もあって、社会的な事情が子どもたちの生活に大きな影響を与えていますよね。子どもたちだけじゃなくて、大人も同じように影響を受けているじゃないですか。その中で集団に馴染みにくいとか、学校に行きにくいという課題も出てきているようです。くじらぐもとして、また賀川記念館として、どういうサポートができるだろうかということを考えます。

大垣：だから地域とも密に繋がらないと。この一年は意識して繋がりを増やそうとしていたので、以前よりも繋がりは増えたかなぁと思いますけど。やっぱり、くじらぐもは「ひまわり学級」（二宮児童館吾妻学童保育コーナーひまわり）と繋がっているのが強いと思います。

藤井：元々、くじらぐもは学童保育ひまわり学級から派生してできました。ルーツは一緒ですよね。くじらぐもひまわり学級も同じ賀川記念館から生まれたものです。ひまわり学級とは、今も情報共有しながら運営をしています。ひまわり学級と繋がれていることは、精神的にも物理的にも大切だと思います。

大垣：くじらぐもにいると、くじらぐもの子どもたちのペースが当たり前に感じてくるのだけれど、ひまわりの子どもたちと関わることで気づくことも多い。くじらぐもとしては、子どもたちが社会性を身に付けて社会に出ていくために必要なことを、ひまわり学級から学んでいます。逆にひまわりは、くじらぐもと関わることによって「福祉って何なの？」とか「発達がゆっくりな人にとって必要なことは何なの？」ということを感じてもらえたら嬉しいです。

　福祉は「やってもらう」「やってあげる」の関係性じゃないと思っています。でも、自分で線を引いてしまっていることもある。そんなことを考えながら日々子どもたちと関わっています。

藤井：違いがあるからこそ、子どものことを真ん中に置いて話し合いができるということですよね。

大垣：それも大きな特徴じゃないかな。ただ、はっきり特徴が現れていない、いわゆる「グレーゾーン」の子どもたちとの関わりには難しさを感じます。

　「特別支援教育」っていうけれど、特別であって特別でない。そのことを考えないといけないと思います。「本当に必要な配慮って何かな？」ということも考えています。

　今、子どもを取り巻く環境も悪くなっているようにも思います。発達の遅れがある子どもと、よく似たような状況になっている子どもが増えたようにも感じます。見分けがつかないですよね。

藤井：環境から発達的な特徴が出ていることもありますね。いずれにしても、深い関わりを求めている人が増えているように感じます。増えているというよりは、今まで見過ごされていただけなのかもしれませんが。

大垣：社会に「ゆとり」がないのでしょうね。子どもも、大人も「ゆとり」がない。くじらぐもでは、「ゆとり」を大事にしていきたいですね。

小野：他機関や賀川記念館との連携について教えてください。

大垣：いろんな支援機関と繋がりたいですね。放課後等デイサービスだけで子どもや家庭を支えることは難しい。でも、他機関と繋がることで支えられることも多い。

　支援する側にも悩み、苦しみがあるから、それを話せる人がいるっていうところが大切なのだと思います。連携する強みなのだと感じています。みんなで考えることで、新しい考え方や支援方法に気づけるということも大きいですね。

藤井：多くの支援機関と繋がることも大切だと思っていますが、やっぱり賀川記念館との連携は必須だと思います。一番身近な存在として、情報共有をしたり、相談したりすることで、新たな観点からのアプローチができると信じています。

　賀川記念館と、社会にインパクトを与えられるような事業連携をしていきたい。それが目標です。

賀川記念館は昔から多様性社会を目指してきた場所。だからこそ、くじらぐもは、賀川記念館事業の一員として、存在感を出してやっていきたいと思います。

　この四月からは「賀川記念館くじらぐも」という名称になる。その意味はすごく大きいなと思っています。目指す先がこの名前に表れているのだと。

大垣：一つのブランドですよね。賀川豊彦さんって。それを振りかざすわけじゃないのですけど、そのブランドや、歴史があるから醸し出せる空気感がある。それは大事にしたいなと思いますね。

　この建物（賀川記念館）って、改めてすごいと思います。友愛幼児園には乳児さん、幼児さんがいる。放課後等デイサービスには小学生から高校生までいる。天国屋カフェに来たら、大人や高齢者の方がいる。そういう幅広い年齢層や多様な背景を持った人がこの中に混在しているわけで。すごいなって思いますね。

藤井：それが何か面白いなって思うし、魅力ですよね。

大垣：明確な線引きがなくて、はっきりしていないところが良いところだと思います。それをくじらぐもも

引き継いでいきたいですね。

小野：物理的な距離ができても、くじらぐもの子どもたちにはぜひ賀川記念館に遊びに来て欲しいです。賀川記念館の中で、誰がどの所属なのかわからないくらい混ざり合っていたら面白いですよね。

「制度」と「制度外」の連携がどのようにできるのかも考えたいと思っています。

藤井：賀川記念館が制度なき時代に行ってきた開拓的視点を持つことが大事ですね。

あと、外から見える賀川記念館のあり方を知ることで、より精神的なつながりになるのじゃないかと思っています。

大垣：これからは、2つの拠点の軸がしっかりできるから、お互いに話し合いながら連携できるってこともあるんじゃないかな。

藤井：賀川記念館としての拠点が増えるので、チャレンジできることを積極的にしていきたいなと思います。

小野：賀川記念館としては、くじらの子どもたちが退所した後の、戻れる場所を記念館の中に作りたいですね。もちろん不登校の課題も一緒に取り組みたいです。

大垣：放課後等デイサービスの退所後のケアは、制度には無いことです。大切なことなのですが…。そこは是非とも、賀川記念館に担ってもらいたいところです。

藤井：本当それこそ隙間ですよね。制度に乗らない賀川記念館だからこそ、自由に活動ができる可能性がありますよね。くじらぐもとしても、「制度にないから」ということで諦めたくないです。子どもや保護者との関係を繋いでおきたいです。安心して気軽に来られる場所や相談できる場所を、賀川記念館に作っておきたいですね。

小野：賀川記念館にもいろんな人がいます。職員も来ている人たちも。多様な人のあり方が、子どもたちのモデルになったり、「多様性が認められている」ということが伝われればいいなと思います。

大垣：誰かに求められるくじらぐもでありたいですね。それがたった一人であっても。

小野：「最も小さき、一人のために」ですね。イエス団憲章でも「最微者のために」と謳われていますね。

大垣：働いているものが「最微者」です。（笑）小さいからこそ、相手のことがよくわかったり、気づくことがあります。

小野：自分が最も小さきものとして、相手に関わる。「弱さ」を隠さずにいることも大切ですよね。対等な関係になるためには、お互いが「弱さ」を曝け出さないといけない。

藤井：子どもたちと関わることで、それは強く感じます。

大垣：「いい支援」「いい関わり」って両方が育つんですよ。つい「大人だから」と思って、上から目線で「こうしたらいい」という風になりがちです。だからこそ、「子どもの話を聞く」ということを意識しないといけないと思います。家庭での親子関係、学校の先生と生徒の関係、職場での関係、全部そうだと思います。でも当たり前のことこそ忘れるんですよね。シンプルなことほど実行するのが難しい。

藤井：それを意識しながら、「当たり前にしない」というのが大事ですね。

（聞き手：小野歩）

多機能型発達支援・賀川記念館くじらぐものご案内

2023年4月より、「多機能型発達支援・賀川記念館くじらぐも」が開設いたします。

「児童発達支援事業」は主に、発達障害がある子どもたちの育ちを支援する事業所です。くじらぐもは公認心理師、言語聴覚士、保育士などの専門職が在籍しており、ひとりひとりに合わせた療育を実施します。

午前中は未就園児の子どものためのプログラムを行います。言語や社会性を身につけるためのプログラムを実施します。

午後は小学生から高校生の居場所となります。居場所として子どもたちの安心感や自己肯定感を育みながら、生活に根付いたSST（ソーシャルスキルトレーニング）などを行い子どもの育ちを支えます。

学童保育（ひまわり学級）や友愛幼児園、二宮保育園と連携しながら地域の子どもの育ちを支援したいと考えています。また賀川記念館との連携を行いながら、制度の枠にとらわれない支援を行っていきたいと思います。

賀川豊彦が制度なきところに制度を作り、制度から漏れた人々と共に生きたことを見つめつつ、良いスタートを切りたいと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

映画上映会を実施しました

コロナの影響によりイベントを開催することが困難な状況が続きましたが、ようやく小規模なイベントを開催することができました。神戸イエス団教会の発案により、日頃より関係がある地域のNPO法人と共に「映画上映会」（2月4日、5日実施）を開催いたしました。

沖縄のことを題材とした映画、『ちむりぐさ　菜の花の沖縄日記』を上映後、交流会を行うことができました。２日間で約70名ほどが賀川記念館にお越しくださりました。

少しずつイベント企画を増やしていきたいと思います。皆様とお会いできることを楽しみにしております。

ボランティアのご案内

当館の活動は皆様のご支援により成り立っております。賛助会費や寄附金によるご支援はもとより、多くのボランティアさんにお助けいただいております。感謝申し上げます。

現在「天国屋カフェでの運営スタッフ」、「はいず の学習支援ボランティア」「ミュージアムの軽作業」などはボランティアさんにお手伝いいただいています。常時ご支援やボランティアを募集しております。

お気軽にお問い合わせください。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

展示ブースがリニューアルされました

ミュージアム奥の展示コーナーがリニューアルされました。これまでは書籍を展示していましたが、リニューアル工事を行いました。今後は、賀川記念館が所蔵している、賀川豊彦直筆の掛け軸などを展示していく予定です。

ぜひお越しください。

現在（2023 年 3 月）に展示しているものは、賀川豊彦が直筆した 3 点の掛け軸です。ぜひご覧ください。

（向かって左から）

1、「野の百合を見よ」
マタイによる福音書 6 章の一節

2、「献身犠牲」
1942 年に医療に恵まれない方々のために奉仕をしていた、山本捷を尋ねてしたためたもの。

3、「信仰癒汝」
マタイによる福音書 10 章 52 節。

天国屋カフェに本棚を設置しました

天国屋カフェの片隅に、本棚を設置しました。元々、研究室にあった本棚を再利用した本棚です。

子育て世代や子どもにとっても居心地が良い空間にしたいと考え、絵本や児童書、ボードゲームやおもちゃなどを設置しています。天国屋カフェが様々な世代の方の居場所となれるよう、学校にいきにくい子どもや「生きづらさ」を抱えた子どもが来られる空間になれるよう、スタッフで考えています。

SNS などで寄付を呼びかけたところたくさんの方が繋がってくださり、多くの書籍を集めることができました。ありがとうございます。

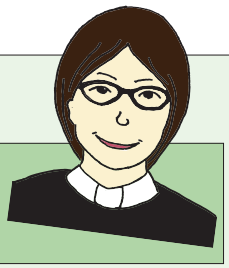
いただいたものが有効に使えるように努めてまいります。今後もご支援お願いします。

講演会・研修会のご案内

当館では研修会及び講演会などを開催させていただいております。
◎当館の研修は、「賀川豊彦の思想と実践」、「賀川記念館（イエス団）における社会福祉実践」、「現代社会における福祉課題」、「人権」など、ご希望に合わせた研修を実施させていただいいております。お気軽にお声かけください。

神戸イエス団教会

上内鏡子牧師の聖書の話



「12人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、
祭司長たちのところへ出かけて行った。」

マルコによる福音書14章10節～11節

イエスはイスカリオテのユダによって裏切られ、権力者らに銀貨三〇枚で売り渡され、十字架で処刑された。だからユダは裏切り者として歴史的に汚名を残してきた。英語のユダ(Judas)は裏切り者の代名詞でもある。しかし、裏切り者はユダだけだろうか。他の弟子十一人も「皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」とマルコ福音書に書いている。最終的には全員がイエスを裏切った。

ユダを裏切り者呼ばわりする資格は誰にあるのか？誰もがユダになりうるし、他の弟子たちのような卑怯な逃げに出る可能性もある。ここに人間の弱さがある。そして、イエスはたった独り死に至るまで全ての結末を担い切った。ここに、神の愛と赦しの奇跡が存在する。

二〇〇六年六月『ユダの福音書』(ナショナル・ジオグラフィック)が発表された。二千年近く前に書かれたユダの福音書が現代に甦った。ユダは、イエスを裏切るという神の使命をあえて貫いたと記されている。人間の弱さを徹底して生き抜き、人間臭さを担い切ったユダの姿が浮き彫りになってくる。

私たちは、イエスを裏切らない自信がどこにあるだろうか。(Ω)

とっておき

天国屋カフェのレシピ

鮭のホイル焼き

【材料】(1人前)
- ホイル(25㎝×30㎝)
- 鮭1切
- 玉ねぎスライス(お好み)
- ニンジンスライス(お好み)
- きのこ(数本)
- レモンスライス(1枚)
- マヨネーズ(お好み)

【作り方】
①ホイルを広げ、玉ねぎスライスを敷きます。
※油は使いません。
②鮭をホイルの上に置き、その上にニンジン、きのこ類、レモンを並べます。(できるだけ美しく！)
③その上にマヨネーズを乗せて、ホイルを閉じます。長いほうをつまんで折込み、両端をねじります。
④オーブンを２００度に予熱し、２０分ほど焼きます。
※オーブンが無ければフライパンに乗せて蓋をし、弱火で焼いてもよいです。
⑤焼き加減はホイルを開けて確認してください。食べる前にポン酢などをかけてください。

このメニューは、天国屋カフェ開設当初にボランティアとしてご活躍された二河照子さんのレシピの一つです。天国屋カフェに代々伝わる、定番メニューの一つです。
あまり手の込まない、でもおいしいお料理です。お魚は鮭でなくてもタラなどでもよいと思います。(い)

◎編集後記

「多機能型児童発達支援・賀川記念館くじらぐも」が四月より開設される。くじらぐもが賀川記念館に戻り、地域の子どもの育ちを支える一端を担えることを嬉しく感じている。▼賀川記念館は制度なき時代より、障がいがある人と共にあった。障がいがある青年のための余暇活動「トウモロー会」やひまわり学級への障がい児の受け入れなどはその大きな働きだったと言える。▼時代は変化している。しかし、「障がい者」を取り巻く環境はどこまで変化しただろうか。「違い」を認め合える社会になっているのだろうか。社会を見渡せば「生産性」、「自己責任」などという言葉の下、多くの「障がい者」が排除されているように感じる。価値観を他者に押し付けていないだろうかと自問する。▼「障がい者」の対義語として「健常者」が使われる。ニノミヤ・アキイエによれば、「健常者」というのは「一時的にできる身体」であるという。それは、誰しもが「できなくなる日がくる」ということを示唆している。榎本てる子は「いつか自分が『できなくなる』日が来るということに気がつけた時、「～のためにする」というイメージから視点を変えて、今の社会を見ていくことができる」と言った。▼私たちはどんな社会を望むのか。自らの実践を問い直しつつ、「違いを認めあう社会をつくりだす」(イエス団ミッションステートメント二〇〇九)実践を続けていきたい。(お)